



日本語のモーラ、音節、フットと単語長：野球声援のリズム結合と外来語アクセント（西光義弘教授還暦記念号）

田中，真一

(Citation)

神戸言語学論叢, 5:207-216

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001535>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001535>



日本語のモーラ、音節、フットと単語長 野球声援のリズム結合と外来語アクセント

田中真一

神戸女学院大学

1. はじめに

本稿は、野球声援の分析を通して、東京方言におけるリズム単位（モーラ、音節、フット）の関係を論じる。まず、いずれの単位も声援リズムの一般化に不可欠であることを指摘する。長い選手名に対しては「モーラ→音節→フット→語」という音韻階層が厳密に守られるが、語が短くなるにしたがって、少しずつそれらの対応が規則的に崩れていき、最終的にはモーラのみがリズムに関与することを示す。その上で、それが語の長さゆえ、上の単位（音節）を介するのが原理的に不可能になるためであることを指摘する。

さらに、リズム単位と音符とが基本的に語末方向から揃えられていくことを示す。長い選手名に対しては語末の「音節」が末尾（第3）音符と、次語末の「フット」が第2音符と、残りが第1音符の位置に揃えられるのに対し、語が一定の長さ（概ね4モーラ以下）になると、後方からと同時に前方からも両者が揃えられることを示す。

次に、上記のリズム結合が、外来語におけるアクセント位置算定の方策とほぼ完全に一致することを指摘する。具体的には、（5モーラ以上の）長い外来語のアクセント位置が、野球声援リズムにおける第2音符の位置と、（4モーラ以下の）短い外来語の大部分におけるアクセント位置が第1音符とそれぞれ一致することを示し、これらの対応が、両者の間におけるリズム結合方策の一致に起因することを指摘する。さらに、このような「長さ」に対する反応の一般性を、他の音韻現象との比較を通して論じる。

1.1. 日本語におけるリズム単位とモーラ、音節、フットの関係

本稿では、日本語（東京方言）における音韻語（prosodic word）とリズム単位との関係を論じるが、一般に、文から分節素に至る音韻構造の階層として、以下のものが知られている（cf. 原口 1994）。このうち、太字部分が本稿と具体的に関連する単位である。

- (1) a. Sentence（文）
 - b. Phrase（句）
 - c. Prosodic Word（語）**
 - d. Root（語根）、Morpheme（形態素）
 - e. Foot（韻脚、フット）**
 - f. Syllable（音節）**
 - g. Mora（拍、モーラ）**
 - h. Segment（分節素）：Onset（頭子音）、Peak（核）、Coda（尾子音）

日本語を記述するリズム単位として、フット(1e)、音節(1f)、モーラ(1g)の三つが存在するが、三者はしばしば完全な階層を成していないように見え、それらの間における関係（ずれ）が議論の対象となっている。

短縮語形成などの語形成過程においては、モーラとフットの間位置する音節(1f)の構造が反映されず、しばしば(2)のように、モーラが音節を分断し、直接フットと結びつくような不整合が観察される。日本語においてフットは2モーラ (bimoraic foot ; Poser 1990) を基本とし、それを文字通りに解釈すれば、場合によっては、両者の間に位置する音節の構造が宙に浮くというわけである ([]はフットを、()は短縮語形成によって省略された部分を、下線はそれによって分断された音節を、#は形態素境界をそれぞれ表す)。

- (2) [エン][ブレ] ← エン(ジン)#ブレ(ニキ)
 [プレ][ステ] ← プレ(ニ)#ステ(ニション)
 [ミス][プリ] ← ミス#プリ(ント)
 [サン][トラ] ← サ(ウン)(ド)#トラ(ック)

その一方で、外来語アクセント付与などの音韻現象を見ると、モーラをもとに音節が、その音節をもとにフットが形成され、さらにフットをもとにアクセントが付与されるというように、「モーラ→音節→フット→語（アクセント）」という(1)の階層が、ほぼ厳密に守られている（田中2005/forthcoming）。¹

以下では、野球声援の分節パターンを詳細に分析することを通して、日本語におけるリズム単位の関係を整理し、そこに単語の長さの関係することを指摘する。

2. 声援リズム

2.1. 野球声援

野球声援は、一般に(3)のような、3音符1休止の4拍子を取ることが知られている（上山1991, 坂野1996, 田中1999, 2005/forthcoming）。後半1小節の始めの3拍分が選手名に対応する（二分音符をδで代用し、「ヤ」は意図的休止1拍分を表す）。

- (3) 4/4 | ♩ ♩ δ | ♩ ♩ ♩ ヤ |
 | かつ とば セー | × × × ヤ |
 | 1 / 2 / 3 / (4) |

×××に入る選手名の長さによって、声援リズムにバリエーションが生じることになるが、ここで注意したいのは、小節内の等時性は厳密に保持されることである。4拍子ということからあきらかなように、後半の小節は均等に4分割され、その始めの3拍分に選手名が当てられる。²

つまり、どのような長さの選手名であろうと、かならず、3拍（(3)の1～3）の音価として実現される。ここにおいて、選手名に対しどのようなリズムの分割および結合が行われるのか、さらには、各々の拍に対し(1)のいずれの単位が対応するのかが問題となる。

本稿では、このような点に着目し、日本語におけるモーラ、音節、フットの関係を論じる。そして、いずれの単位が欠けても野球声援の一般化が不可能であること、さらには、基本的に(1e～g)の階層「モーラ→音節→フット」が守られることによってリズムが整えられながらも、選手名が短くなるにつれて、音節構造が宙に浮き「モーラ→フット」という結合が見られ、最終的には「モーラ」に基づいてリズム単位と音符とが揃えられることを示す。そして、後方からのリズム算定を基本としながらも、語が短くなるとともに前方からの算定も同時に許容されるようになることを指摘し、その言語学的意味を考察する。

2.2. 調査

2～6モーラ語のすべての音節配列（重音節H、軽音節Lによる配列計31種；2モーラ語2種、3モーラ語3種、4モーラ語5種、5モーラ語8種、6モーラ語13種）および、7モーラ語以上の代表的な選手名を想定した収集を行った。声援のデータ収集にあたっては、野球場でじっさいに確認（録音）したもの、テレビ中継で確認（録音）したもの、野球観戦に通じている2名の被験者（いずれも30代後半男性）に確認したものを併せて使用した。いずれのデータ・声援パターンも筆者（野球観戦歴30年以上）の内省とすべて合致した。以下では、各音節配列に基づき声援の型の規則性を確認する。

3. 分析

3.1. 長い選手名

まず、長い選手名（基本的に5モーラ以上）の声援を示す。ここでは、「モーラ→音節→フット」という階層・構築がほぼ完全に守られている。末尾音節が第3音符に揃えられ、その種類は問題とされず、末尾音節であればLとHどちらが生起しても構わない。そして、第2音符を満たす音節の配列をもとに、(4)～(6)の3種の型に分類できる（田中2005/forthcoming）。(4a)～(6a)はHLHを除く5モーラ語7種（HLHについては後述）、(4b)～(6b)は6モーラ語すべての音節型計13種を表している（(4c)～(6c)は、それより長い選手名の一部を挙げてある）。なお、声援リズムに直接影響を与えないため、第3音符に当てられる種類（H/Lの別）はここでは問題としない。また、後で外来語アクセントとの関係を論じるため、声援の例として、便宜上おもにカタカナの選手名を掲げる。これらの声援型はすべて、音節構造の等しい日本人名（和・漢語）にも当てはまる。

(4) H → 第2音符

- J J J
 a. H /H/ L : イン/ファン/テ（大リーグ・タイガース）
 ボー/チャー/ド（大リーグ・ホワイトソックス）
 LL /H/ L : セギ/ノー/ル（日ハム）、きた/べっ/ぷ（北別府；元広島）
 L /H/ H : デ/シン/セー（元ヤクルト）、フ/ラン/ボー（オリックス）
 b. HL /H/ L : アイル/ラン/ド（元広島）
 LH /H/ L : ベタン/コー/ト（大リーグ・マリナーズ）、ブライ/アン/ト（元近鉄）
 LLL /H/ L : デスト/ラー/デ（元西武）、デステ/ファー/ノ（元中日）
 H /H/ H : アン/ダー/ソン（元中日）、ペン/パー/トン（元西武）
 LL /H/ H : デル/カー/メン（大リーグ・レッドソックス）
 c. L /H/ L : ズ/レー/タ（ロッテ）
 HL /H/ H : マック/ファー/デン（元大洋）

(5) LL → 第2音符

- J J J
 a. LL /LL/ L : こば/やか/わ（小早川；元ヤクルト）、おが/さわ/ら（小笠原；巨人）
 H /LL/ L : ゴン/ザレ/ス（ヤクルト）、アー/ノル/ド（元近鉄）
 L /LL/ H : ク/ロマ/ティー（元巨人）、オ/グリ/ビー（元近鉄）
 b. LLL /LL/ L : マクド/ナル/ド（大リーグ・ブルージェイズ）
 HL /LL/ L : コント/レラ/ス（大リーグ・ホワイトソックス）
 LH /LL/ L : フラン/シス/コ（大リーグ・レンジャース）
 LL /LL/ H : マカ/ナル/ティー（大リーグ・パドレス）
 H /LL/ H : ジュー/コブ/セン（大リーグ・マリナーズ）
 c. L /LL/ L : き/よは/ら（オリックス）

(6) HL → 第2音符

↓ ↓ ↓

- a. L /HL /L : ア/レック/ス (広島)、マ/ホーム/ズ (元横浜)
 b. LL /HL /L : フェル/ナンデ/ス (西武)
 H /HL /L : バー/フィール/ド (大リーグ・パドレス)
 L /HL /H : ロ/バート/ソン (大リーグ・タイガース)
 c. HL /HL /L : げんご/ろーま/る (源五郎丸; 元阪神)

末尾音節が第3音符に揃えられるのと同時に音節量の中和が見られ (LとHとが区別されず)、その直前の音符を満たすものとして、音節に基づくフット構築が行われる。³ 具体的には、(4)、(5)のように、次語末音節から前方に向かって直ちにフットが形成されるような音節配列 (つまり、(4)のH、あるいは(5)のLL) であれば、そのフットに対し第2音符を当ててのに対し、それが直ちにできないような配列 (次語末音節Lの直前にHが現れる(6)のHL) であれば、その一つ前、つまり語末3音節目のHによってフットを構築し、そこ(HL)に第2音符を揃えることになる (言うまでもなく、語末3音節目がLであれば、その時点で次語末音節とともに (LL) のフットが構築される(5)の型となる)。つまり、第2音符は、語末音節を外した、もっとも右端の音節に基づくフットに揃えられることになる。

以上のことは、まず、声援リズムが語末方向から揃えられることを示しており、さらには、モーラとフットとの中間単位として「音節」の存在が不可欠であることを示している。

このように、長い選手名においては、第2音符の3種類 (H/LL/HL) と、第3音符の2種類 (H/L) とを掛け合わせた6種類が声援リズムの基本形となる。なお、第1音符には残りの音節がどのような配列であろうと、すべて入れられることになる。言葉を換えれば、これら6つの型の前に第1音符を満たす要素が1音節以上あれば、(7)のようにどのような名前も、すべてこれらの型で生起することとなる。

(7) 第2音符：音節に基づくフット構築と単語長

- a. 次語末音節H (語全体で3音節以上)
 第1音符＝1音節以上、**第2音符＝1音節**、第3音符＝1音節
 b. 次語末音節L (語全体で4音節以上)
 第1音符＝1音節以上、**第2音符＝2音節**、第3音符＝1音節

このように、単語長に着目すると、4音節以上 (ただし、次語末音節がHの場合は3音節以上) の場合は、音節をもとにフットが構築される(1)の階層に基づく声援パターンが取られる。

3.2. やや短い選手名

では、それより短い選手名はどうであろう。まずは、(4)～(6)から第1音符の部分を除いた「6種」の音節型を見る。ここでは (4)～(6)における第1音符の部分が存在しないことになるが、声援リズムはすべての音符に音価を与えるのが前提であるので、そこを空白にすることは許容されない。したがって、前節で確認した第2音符における「音節→フット」という構築が、何らかの形で崩れることになる。

興味深いことに、たとえ音節によるフット構築が崩れても(10)に見られるように、モーラからのフット構築「モーラ→2モーラフット」が可能な限り守られるようである。(8)～(10)は、それぞれ(4)～(6)の第1音符の部分に当てられた音節を取り除いたもので、(8a)～(10a)は、語末がLであるもの、(8b)～(10b)はそれがHであることを示している (mは自立モーラを、Mは特殊モーラを、下線は異なる音符によって分断された音節をそれぞれ表す)。

		↓	↓	↓		
(8)	a. HL	<u>m</u>	/ <u>M</u>	/ L	:	<u>ロ</u> / <u>—</u> / <u>ズ</u> (オリックス)
	b. HH	<u>m</u>	/ <u>M</u>	/ H	:	<u>タ</u> / <u>イ</u> / <u>ロン</u> (中日)
(9)	a. LLL	m	/ m	/ L	:	ゴ / メ / ス (元中日)
	b. LLH	m	/ m	/ H	:	お / ち / あい (中日)
(10)	a. HLL	<u>m</u>	/ [<u>Mm</u>]	/ L	:	<u>デ</u> / [<u>ー</u> <u>ビ</u>] / <u>ス</u> (元中日)
	b. HLH	<u>m</u>	/ [<u>Mm</u>]	/ H	:	<u>オ</u> / [<u>ー</u> <u>ス</u>] / <u>ティン</u> (元近鉄)

声援リズム型の調整は、(4)～(6)において第2音符を占めていた音節型のみによって行われる。つまり、この長さでは、依然として末尾音節と末尾音符との一致（および末尾音節量の中和）が守られている。このような意味で、音節がフット構築以外の部分において単独で、一定の役割を果たしているといえる。と同時に、一貫して後方からリズム単位と音符とが揃えられることが確認できる。

ここで、次の2点が問題になる。一つは、末尾音節以前においてリズム単位と音符との間で具体的にどのような調整が行われているのかということである。二点目は、そもそも末尾音節の中和する条件は何かということである。

まず前者については、第2音符が、音節によらずとも可能な限りフット構築((10)の[])を目指していることがわかる。(10)の3音節語に着目すると、それは音節数の等しい(9)と異なり、語頭の重音節が分断されている。このことは3音節語の各音節が各音符に対応した仮想の(11)よりも、第1音節のHを分断し、その後半要素(M)を第2音符に送り、そこに[Mm]の2モーラ（フット）を対応させる(10)の方策が優先されることを示している。

(11)		*↓	↓	↓		
	a. HLL:	*H /	L /	L (= *mM / m / L)	↔	(10a)
		*デー /	ビ /	ス		
	b. HLH:	*H /	L /	H (= *mM / m / H)	↔	(10b)
		*オー /	ス /	ティン		

つまり、末尾音節を第3音符に揃えた結果3モーラが残れば、音節配列に関わりなく強制的にそこを「1モーラ+2モーラ」に分割し、後半の2モーラフットを第2音符に揃えるということである。以上を長い声援と比べると、たとえば(6)のように音節に基づくフット構築が可能な長さであれば、そのような構築が優先され音節の分断は行われぬが、末尾を除く音節がHL（3モーラ）であれば、音節構造を優先させた(11)の分節方法より、次語末へのフット構築を意識した「第1音符=m、第2音符=Mm」という分節方法が優先するというわけである。なお、(8)と(9)は末尾音節を第3音符に充てると、前方にいずれも2モーラしか残らないため、第2音符に（2モーラ）フットを当てるのが不可能な構造にある（仮にそうすると、第1音符の部分が空白になってしまう）。⁴

それでは(8)、(9)は、どのような方策を取るのだろうか（これが前述の二点目の問題である）。末尾音節量中和の条件を、単語長との関係に基づき確認する。

(8)、(9)は、いずれも末尾音節が末尾音符と揃えられているが、これには、第1・第2音符それぞれに1モーラずつ、合わせて2モーラの存在することが前提である。その2モーラを構成する音節構造（(8)のようなHによるものか、(9)のようなLLによるものか）はまったく問題とされていない。この時点において、「モーラ」という単位が音節やフットを形成する以外の面において、つまり単独で重要な役割を果たしてくる。

ここまですとまとめると、一定の長さ（4音節以上、ただし次語末音節がHであれば3音節以上、モーラでは概ね5モーラ以上）の選手名に対しては、次語末に音節を反映したフットを構築し、そこに第2音符を充て末尾音節を第3音符に揃えるということになる。それ

以下の長さの語においては、末尾音節の前に2モーラ以上あれば、末尾音節と末尾音符とを揃えることが可能になる。このとき、語末音節の前が3モーラならば、後ろの2モーラでフットを作り第2音符に揃えた後、残りに第1音符を当てるのに対し、そこが2モーラであれば、それぞれのモーラを第1、第2音符に揃えるという方策を取ることになる。

3.3. 短い選手名

さらに、前節よりも短い声援パタンの検証を行う。具体的には、(8)~(10)からさらに第1音節を除いた、LH(12)、LL(13a)、H(13b)の3種が考えられる（これで2モーラ以上のすべての声援パターンが示されたことになる）。まずは、LHの声援パターンを確認する。

- (12)
- | | | |
|---------|-------------------------|--------------|
| | J J J | |
| a. LH : | m / <u>m</u> / <u>M</u> | |
| | ベ / <u>ニ</u> / <u>ー</u> | (ベニー：ロッテ) |
| | シ / <u>ピ</u> / <u>ン</u> | (シピン：元巨人) |
| b.*LH : | m / — / H | (m / — / mM) |
| | * ベ / — / ニー | |
| | * シ / — / ピン | |

- Cf.
- | | | |
|---------|-------------|---------------|
| | J J J | |
| a. HH : | m / M / H | タ／イ／ロン = (8b) |
| b.LLH : | m / m / H | お／ち／あい = (9b) |

注目すべきは、LHに関して、末尾音節と末尾音符とを揃える(12b)の方策は採られず、音節が第2、第3音符に跨り分断されることである。この点が、同じく末尾に重音節を持つ(8b)や(9b)と対照的なところである。上記と(12)との間のこのような相違は、前節で確認したように、末尾音節量中和に関して、末尾音節より前方に2モーラ以上を要求すること起因する。その部分に1モーラ(L)しかないLHにおいては(12b)のように、第2音符にモーラを挿入することで末尾音節を揃えるという方策よりも、もともと存在するモーラを基にした（かつ音節を分断した）音符との対応が優先されるというわけである。

さらに短い単語（2モーラ語）になると、(13)のように、それぞれのモーラを両端の音符に揃えた後、第1モーラを1つ分伸張させ、それを第2音符と対応させる。このようなマッチングは、前節で分析した(8)と(9)における関係と同様、音節構造の違い（HかLL）は問題とされずに行われる。

- (13)
- | | | | | |
|---------|-------------|----------|--|---------------|
| | J J J | | | * J J J |
| a. LL : | m / — / m | | | * m / m / — |
| | に / — / し | (仁志：横浜) | | * に / し / — |
| | た / — / に | (谷：巨人) | | * た / に / — |
| b. H : | m / — / M | | | * m / M / — |
| | そ / — / ん | (宣：元中日) | | * そ / ん / — |
| | チェ / — / ン | (チェン：中日) | | * チェ / ン / — |

つまり、3モーラ以下の選手名は、その短さゆえ、モーラをもとに付与されるのが基本となる。長い語に対しては、相対的に音韻階層の上位に位置する単位（音節、フット）が用いられ、短い語に対しては下位に位置する単位（モーラ）が用いられるというわけである。じっさい、定型のほとんどない歌謡におけるリズム単位と音符付与との関係においても、これと同様の傾向（長い語には音節をもとに、短い語にはモーラをもとに音符を与えるという方策）が観察される（田中2005/forthcoming）。

ここまでをまとめると、野球声援においては、フット形成およびリズム形成をめぐり、音節とモーラとが混在した分節が行われていることになる。そして単語が短くなるにつれて、「フット→音節→モーラ」という順に、大きな単位から小さな単位へと、関与する単位の中心が移っていくことが確認できる。いわば、語を測る物差しが単語長に応じて変換し、長い単語については、大きな物差し（音節にもとづくフット）が、短い単語には小さな物差し（モーラ単独）が、といったように使い分けられていることになる。

ただし、ここで確認したいのは、大きな物差しが使えないのは日本語がけっしてそれを持っていないからではなく、むしろ、それを使う前提にない（たとえば、音節に基づくフットを形成した時点で、他の音符が空白になるほど短い語である）からということである。

また、上記のことは、リズム単位と音符とを揃える方向にも密接に関係する。語がある程度の長さを有していれば、一貫して後方から両者が揃えられるのに対し、モーラのレベルで両者を揃えるということは、後方と同時に前方も意識されることを示している。換言すれば、短い語に対する声援においては、前後いずれから揃えても表面的には同じ効果が得られることになる。このような、長さをめぐる音韻単位の相違とリズムを揃える方向との関係は、以下に述べる外来語アクセント付与の方策とほぼ完全に一致する。

4. 考察

4.1. アクセントとの関係

4.1.1. 長い語（おもに5モーラ以上）の声援とアクセント

選手名が5モーラ以上の野球声援(3.1 節)は、まず、末尾音節を末尾音符に一对一に対応させ、次に、第2音符をH、LL、HLいずれかの音節型と一致させ、最後にその余りすべてを第1音符に対応させるという方策であった。

(14)は、3.1 節の6モーラ語選手名すべての音節構造（13 種類）の声援方策を再掲し、そこに各音節配列におけるデフォルトの外来語アクセント位置の情報を加えたものである（他の長さについては省略したが下記と同様である。外来語アクセントの分析については、田中 2005/forthcoming を参照）。これを見ると興味深いことに、第2音符の先頭音節が外来語におけるデフォルトのアクセント位置と一致する（□はアクセント核の位置を表す）。

(14) 5モーラ以上の語（6モーラ語）における声援パターンとアクセント規則

a. $H\Box$: 第2音符 = (4b)

	J	J	J	
HL	/	$H\Box$	/	L : アイル/ $\Box$ ラ/ン/ド (元広島)
LH	/	$H\Box$	/	L : ベタン/ $\Box$ コ/ー/ト (大リーグ・マリナーズ)
LLL	/	$H\Box$	/	L : デスト/ $\Box$ ラ/ー/デ (元西武)、デステ/ $\Box$ ファ/ー/ノ (元中日)
H	/	$H\Box$	/	H : アン/ $\Box$ ダ/ー/ソン (元中日)、ペン/ $\Box$ パ/ー/トン (元西武)
LL	/	$H\Box$	/	H : デル/ $\Box$ カ/ー/メン (大リーグ・レッドソックス)

b. $L\Box L$: 第2音符 = (5b)

	J	J	J	
LLL	/	$L\Box L$	/	L : マクド/ $\Box$ ナ/ル/ド (大リーグ・ブルージェイズ)
HL	/	$L\Box L$	/	L : コント/ $\Box$ レ/ラ/ス (大リーグ・ホワイトソックス)
LH	/	$L\Box L$	/	L : フラン/ $\Box$ シ/ス/コ (大リーグ・レンジャース)
LL	/	$L\Box L$	/	H : マカ/ $\Box$ ナ/ル/ティ (大リーグ・パドレス)
H	/	$L\Box L$	/	H : ジェー/ $\Box$ コ/ブ/セン (大リーグ・マリナーズ)

c. $\boxed{H^1 L}$: 第2 音符 = (6b)

LL / $\boxed{H^1 L}$ / L : フェル/ $\boxed{ナ^1ンデ}$ /ス (西武)
 H / $\boxed{H^1 L}$ / L : バー/ $\boxed{フイ^1ール}$ /ド (大リーグ・パドレス)
 L / $\boxed{H^1 L}$ / H : ロ/ $\boxed{バ^1ート}$ /ソン (大リーグ・タイガース)

これは、野球声援におけるリズム結合の方策と、外来語におけるアクセント位置算定の手がかりとしてのリズム結合とが、同じ原理に基づいていることを示している。

末尾音節 (H または L) を語末に揃え、それを除いた次語末位置にできる限り 2 モーラフットを揃え、そのまともにアクセント (声援ならばリズムパターンを特徴づける第 2 音符) を付与する。次語末が重音節 (H) ならばそこへ自動的にフットが形成されるが、そこが軽音節 (L) であればそれのみではフットが形成されないの、さらにもう 1 音節前方を読み、その前半部分が語全体の主要部 (外来語ならデフォルトのアクセント位置、声援ならば第 2 音符の開始部分) になるという方策である。

4.1.2. 短い語 (おもに 4 モーラ以下) の声援とアクセント

このような、声援リズムと外来語アクセント付与との間の共通性は、短い語においても見受けられる。3.2 節で確認した(8)~(13)の短い選手名に対する声援リズムと、その音節構造を持つ外来語アクセントとの対応を以下に示す。

	$\boxed{J}$ $\boxed{J}$ $\boxed{J}$	(例) $\boxed{J}$ $\boxed{J}$ $\boxed{J}$	
(15) a. $H^1 L$:	$\boxed{m^1}$ / M / L	$\boxed{ロ^1}$ / ー / ズ (オリックス)	= (8)
b. $H^1 H$:	$\boxed{m^1}$ / M / H	$\boxed{タ^1}$ / イ / ロン (中日)	
(16) a. $L^1 LL$:	$\boxed{m^1}$ / m / L	$\boxed{ゴ^1}$ / メ / ス (元中日)	= (9)
b. $L^1 LH$:	$\boxed{m^1}$ / m / H	$\boxed{お^1}$ / ち / あい (落合; 中日)	
(17) a. $H^1 LL$:	$\boxed{m^1}$ / M m / L	$\boxed{デ^1}$ / ービ / ス (元中日)	= (10)
b. $H^1 LH$:	$\boxed{m^1}$ / M m / H	$\boxed{オ^1}$ / ース / ティン	
(18) $L^1 H$:	$\boxed{m^1}$ / m / M	$\boxed{ベ^1}$ / ニ / ー (ベニー: ロッテ)	= (12)
(19) a. $L^1 L$:	$\boxed{m^1}$ / ー / m	$\boxed{に^1}$ / ー / し (仁志: 横浜)	= (13)
b. H^1 :	$\boxed{m^1}$ / ー / M	$\boxed{チェ^1}$ / ー / ン (チェン: 元中日)	

まず、第 2 音符と (音節を介さない) 2 モーラフットとが対応する(17)の音節型については、アクセント位置に対応する第 2 音符主部 (前半部分) が音節後半部分、すなわち、特殊モーラ (M) であるため、それが前方の第 1 音符に移動するものとして解釈できる。これと同時に、上記に矛盾することなく、別の解釈を施すことも可能である。

(15)~(19)と(17)とを統一して説明すると、以下のような一般化が可能になる。

- (20) 第 2 音符に対し、音節に基づくフット構築が不可能である単語長においては、
第 1 音符の部分がアクセントの位置に対応する

つまり、語がある程度の短かさになると、単語のリズムおよびアクセント位置が、語末と同時に語頭からも算定できるという一般化が可能になる。その短さとは、4 モーラ以下と概ね一致する。⁵ じっさい、複合語のアクセント位置に関しても、4 モーラと 5 モーラとの間に、位置を算定する方向について境界の観察されることが報告されている (田中 2005/forthcoming)。

このように、外来語アクセント規則と野球声援との間には共通性が見られ、それは両者の間でリズム結合の方策がほぼ一致するからであることがあきらかになった。

4.2. 短縮語形成との関係

最後に、声援リズムと短縮語形成との共通性を指摘したい。

一般に短縮語形成の長さの制約として、「2モーラ以上4モーラ以下」という音韻条件が知られている（窪菌・小川 2004）。短縮語が成立する4モーラ以下という長さ、野球声援における4モーラ以下のリズム結合との間に、音節構造保持／非保持に対する共通性が見られる。

短縮語は語を一定の長さにするために、その他の部分を省略する過程であるが、(2)で見たように、この過程において（2モーラフットを形成するために）しばしば音節を分断する操作が行われる。短縮語自体4モーラ以下を前提としているので、そのような音節の分断は5モーラ以上の場合には、起こらないということが含意される。つまり、短い語を形成する過程においては、モーラに基づく（音節を介さなくても構わない）フット構築が優先されるということになる。

一方、これまで論じてきた野球声援は、短縮語とは異なり、要素を省略することは行われないが、音符の割り振り方を通してリズム単位の結合と分断を行っている。この過程で、条件によっては音節の分断が行われるが、すでに確認したように、そのような分断はおもに4モーラ以下で起こり、5モーラ以上になると一貫して音節構造を保持したフット構築（リズム形成）が行われるようになる。

このような意味において、短縮語形成と野球声援との間に単語長をめぐる共通性があると考えられる。両者とも単語長に合わせた音韻単位（リズム単位）の物差しを使用しているが、強調したいのは、(1)の「モーラ→音節→フット」という階層の結合は、短い語においては表面に現れる可能性（前提）がないものの、前提を満たす条件下であれば確実に出現し、もともと日本語に備わっているということである。

5. 結び

本稿は、野球声援におけるリズム結合の分析を通して、日本語におけるリズム単位の関係を論じ、その言語学的一般性を示した。おもに5モーラ以上の長い選手名に対しては、語末からリズム単位と音符とが揃えられ、語末音節が末尾音符と、（音節に基づく）フットが第2音符と、それ以外が第1音符とそれぞれ揃えられることを示し、この方策が、同じ長さの外来語におけるアクセント付与とほぼ一致することを指摘した。具体的には、声援第2音符の位置と外来語アクセントの位置とがほぼ完全に対応することを示した。

また語が短くなるにしたがって、「次語末フット（音節構造反映）」、「次語末2モーラフット（音節分断）」、「末尾音節」の順にリズム単位の結合が崩れてゆき、最終的にはモーラに基づく音符付与がされることを、また、次語末フットの構造が崩れた時点で、アクセントとの対応が、第2音符から語頭音符（第1音符）の位置に移ることを指摘した。この現象が、声援リズムおよびアクセント位置算定双方にとって、語末からの距離が短くなるためと同時に、語の短さゆえに語頭からの算定が可能になるため起こることを示し、それが他の音韻現象とも共通することを指摘した。

付記

本稿は、博士論文（田中2005/forthcoming）第2章の一部をもとに、新たな分析、考察を加えたものである。

注

1 このような形態構造と音韻階層との厳密な一致は、Lx~Prと呼ばれる (Prince & Smolensky 1993/2002)。

2 本稿では、用語の混同を避けるため、言語リズムに関する(lg)の単位に対して「モーラ」という術語を、音楽における小節内の区切りに対して「拍」という術語を用いる。

3 このような、末尾位置における音節量中和の現象は、現代定型詩の字余りや歌謡曲の歌詞に対する音符付与など、さまざまな面において観察される (田中1999,2005/forthcoming)

4 このような意味において、野球声援を音節のみで分析するのも不適當であり、すべてのリズム単位 (モーラ、音節、フット) が必要となる。3音節語を想定した場合、もっとも単純と思われる音符付与は各音節に一つずつ音符を対応させる方策であるが、全8種の音節配列を見ると、①H/H/H (アン/ダー/ソン)、②L/H/H (デ/シン/セー)、③H/H/L (イン/ファン/テ)、④L/H/L (ズ/レー/タ)、⑤L/L/H (イチ/ロー)、⑥L/L/L (かけふ) の6種にはそれが当てはまるが、⑦HLH (*オー/ス/ティン) と⑧HLL (*じょー/じ/ま) にはそれが当てはまらない。したがって、これまでの議論による方策 (末尾音節を末尾音符に揃え、第2音符に可能な限りフットを要求する) が適當であると考えられる。

5 ただし、4モーラ語においても、次語末音節にフットが形成され、かつ、その一つ前に音節が残る「L(H)L」と「L(LL)L」は、フット構造が優先され、第2音符とアクセント位置とが一致する。しかしながら、外来語アクセントにおいて後者「LLLL」に対しては、「L(LL)L」と同時に「(LL)LL」というフット構造も可能であり、「L(L[⌈]L)L」(チェリ[⌈]スト) と同時に「(L[⌈]L)LL」(ア[⌈]クセス) のような先頭に核の来る型も同じ割合で許容される (田中2005/forthcoming)。

参考文献

- ベースボール・マガジン社編 2005 『MLB30球団主力選手写真名鑑&全球場観戦ガイド (2005年版)』ベースボール・マガジン社
- 別宮貞徳 1977 『日本語のリズム』講談社現代新書
- 原口庄輔 1994 『音韻論』開拓社
- Ito, J. 1990 Prosodic minimality in Japanese, *Chicago Linguistic Society 26. II: Papers from the parasession on the syllable in phonetics and phonology*, 213-239.
- 窪菌晴夫 1998 「モーラと音節の普遍性」『音声研究』第2巻第1号, 5-15.
- Kubozono, H. 1996 Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation, 『音声学会会報』第211号, 71-82.
- 窪菌晴夫・小川晋史 2004 「『ストライキ』はなぜ『スト』か? —短縮と単語分節のメカニズム—」『現代形態論の潮流』くろしお出版.
- Poser, W. 1990 Evidence for foot structure in Japanese, *Language* 66, 78-105.
- Prince, A. & P. Smolensky 1993 *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*, Technical Report #2 of Rutgers Center for Cognitive Science, Rutgers University [2002 Blackwell Publishing]
- 坂野信彦 1996 『七五調の謎をとく—日本語リズム原論』大修館.
- 田中真一 1996 「日本語の音節構造と音韻現象」大阪外国語大学修士論文.
- 田中真一 1999 「日本語の音節と4モーラのテンプレート—川柳とプロ野球声援における『字余り』の分析—」音声文法研究会編『文法と音声II』くろしお出版 261-290.
- 田中真一 2005/forthcoming 『日本語におけるリズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』神戸大学大学院文化科学研究科博士論文 (くろしお出版より公刊予定).
- 上山あゆみ 1991 『はじめての人の言語学—ことばの世界へ』くろしお出版.